J.S.V.R.
ニュースレター

No.31
2024.11

発行人　日本バレーボール学会
　　会長　黒　川　貞　生
発行日　2024年11月１日
事務局
〒422-8581 静岡市駿河区弥生町6-1
常葉大学静岡草薙キャンパス 高根研究室
Tel&Fax 054-297-6264
E-mail:jsvr.office@gmail.com
https://jsvr.org/

日本バレーボール学会
The Japanese Society of Volleyball Research

巻 頭 言

日本バレーボール学会副理事長
田中 博史（大東文化大学）

学会員の皆さまにおかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素より学会活動に対し格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

1995 年に現日本バレーボール学会の前身であるバレーボール研究会が発足し、1996 年 5 月 25 日（土）に当時の早稲田大学体育局を会場として第 1 回総会・研究会が開催されました。その当時、私は修士課程の学生であり、恩師である川合武司先生からバレーボール研究会の総会・研究会があるから手伝うように指示を受け、当日会場で受付等の業務を行いながらこの研究会に興味を持ち当日に入会したのを思い出しました。この度皆さまに日本バレーボール学会ニュースレター第 31 巻をお届けするにあたり、約 30 年間の本学会の歴史を振り返りながら巻頭言を執筆させて頂いております。初代会長である朽堀伸二先生初め歴代の会長や理事の方々、会員各位によって本学会は支えられ今日に至っております。本学会は「科学的研究でバレーボールの発展と進化を」を学会のモットーとし、会則には「本会は、バレーボールに関する科学的研究とその発展に寄与するとともに、会員相互の情報交換、研究協力を促進することによって文化としてのバレーボールの発展をはかり、これによってバレーボールの実践に資すること」を学会の目的として掲げています。このことを果たすべく、ミーティングや学会大会ではバレーボール界のトレンドをいち早くキャッチし多様なテーマのもとで開催し、機関誌・ニュースレターの発刊等を通じて最新の研究成果の公表を行ってきました。発足以来 30 年という月日が経過している中で、時代は大きく変化しバレーボールのみならず様々なスポーツで科学的視点がより重要視されるようになりました。本学会においても、バレーボールに関する様々なエビデンスの蓄積と情報の発信をさらに推進していきます。今後も会員の皆さまの積極的なご参加と情報提供をよろしくお願いいたします。

本年におけるバレーボール日本代表の活躍は、5 月に開幕したパリオリンピックの前哨戦となるネーションズリーグにおいて、男女ともに銀メダルを獲得し日本中を沸かせました。8 月に開催されたパリオリンピックにおいての日本男子チームの激闘は、従来からのバレーファンに加え、多くの方が応援して下さいました。チームが目標としていたメダル獲得には至りませんでしたが、ナショナルチームの活躍が低迷し、かつてのお家芸だったバレーボールもすっかりマイナースポーツとなってしまったと揶揄

されたりしたこともありましたが、それらをすっかり払拭し、今後の益々の活躍が期待されると共に子ども達のバレーボール離れも解消方向に向かうのではないかと思います。因果関係は定かではありませんが、近年中学生の男子バレー部員が増加傾向にあるのもナショナルチームの活躍が一因であると考えられます。このめざましい活躍には選手の努力はもちろんですが、これまでの経験則だけでなくスポーツ科学的視点に立ったコーチングの賜物であると感じます。1つの節目であるオリンピックが終了し、フィリップ・ブラン男子監督、眞鍋正義女子監督から次のロサンゼルスオリンピックへ向けた新体制となります。本原稿執筆時点では新監督について公表されておりませんが、これを契機に更なる活躍を期待し、本学会としてもバレーボールの実践に資する最新の科学的知見によって後押ししたいと思います。

現在本学会が行っているイベントは、従来から行っている「学会大会」、「バレーボールミーティング」に加えて「バレーボールセミナー」を実施しております。実施形態もコロナ禍への対応で一気に普及したオンライン会議システムを活用し、ハイフレックスや完全オンラインなどで、参加者がより参加しやすい形態にて行っています。昨年度3月に明治学院大学で実施された第29回大会においては、國分裕之氏（一般社団法人ジャパンバレーボールリーグチェアマン）に「なぜ世界最高峰のリーグを目指すのか -V.LEAGUE REBORN について -」をテーマとした特別講演、釜渕俊彦氏（一般社団法人ジャパンバレーボールリーグクラブライセンス事務局）、堺大輔氏（東京グレートベアーズ GM）、降旗雄平氏（ヴォレアス北海道 GM）、中西了将氏（NEC レッドロケッツ GM）、佐藤嗣朗氏（埼玉上尾メディックス GM）をお迎えし「トップリーグの展望」をテーマとしたシンポジウムを行いました。本年度開催される SV リーグについてお話し頂き、わが国トップリーグの今後について理解を深めることが出来ました。また、布村忠弘氏（一般財団法人北陸予防医学協会）に「ブロック練習が楽しくなるには？初心者からトップカテゴリーまで、ブロック動作習得とトータルディフェンスの鍵」をテーマにオンコートレクチャーにて、特にブロックに関する知見をご紹介頂きました。今後の学会大会、バレーボールミーティング、バレーボールセミナーを通じて、学会員の皆さまへ有益となる情報提供の場を用意して参りますのでご期待下さい。

本学会のホームページがリニューアルいたしました。学会に関する最新情報をこちらに掲載しておりますので是非一度ご確認をお願いします。また、本学会の機関誌であるバレーボール研究に掲載された論文は現在最新号から全て J-STAGE にてご覧頂けます。本学会ホームページよりリンクされておりますので一読頂けますと幸いです。公式の Facebook ページも運用しておりますので是非「いいね！」を押して頂き、学会の最新情報を受け取って頂ければと思います。

最後になりましたが、今後も学会として与えられた使命を果たし、学会員の皆さまがバレーボールを科学的視点で捉え、様々な立場でバレーボールをさらに楽しんで頂くことで、バレーボールの愛好者を増やし、国際的な競争力向上に繋げられるよう尽力して参ります。会員の皆さまにおかれましては是非周囲の方々に本学会をご紹介頂き、ご入会を進めて頂きたいと思います。今後もどうぞよろしくお願いいたします。

2024 バレーボールミーティング報告

テーマ:「FIVBインストラクターと考える日本バレーボール指導のアップデート」

概要: 本事業は、バレーボール学会員はもちろんのこと、バレーボールを愛好する選手・コーチ同士が現場で抱える実践的な課題を共有し、互いの活動から学び合う場を創出することで、選手・コーチの継続的な学びの支援を目的としています。また今回は、FIVB（国際バレーボール連盟）のコーチインストラクターとして、FIVBが主催するコーチ養成（資格講習）のコーチコースの講師を世界各地で担当している加藤a敦志氏を招聘し、現在の国際的なバレーボール指導の実際を紹介しながら、日本のバレーボール指導との比較から、日本のバレーボール指導のアップデートを図り、日本のバレーボールコーチ全体の資質を向上させることを目的として開催しました。

日　時：2024年8月18日（日）10:00～16:00
主　催：日本バレーボール学会
会　場：北翔大学

<登壇者の紹介>
パネリスト: 加藤 a 敦志 （FIVBコーチインストラクター）
・国際バレーボール連盟（FIVB）コーチインストラクター：インターナショナルコーチの育成
・ヨーロッパバレーボール連盟（CEV）コーチコンベンション2024年度スピーカー：U18以下プレイ

ヤーの育成についてのレクチャー
・各カテゴリー男子日本代表チームマネージャー 2017年～
・国際協力機構（JICA）海外協力隊版ボール技術専門委員
・日本バレーボール協会（JVA）体罰防止プロジェクトセットアップスタッフ 2018年
・日本サッカー協会（JFA）体罰問題に関するアドバイザー 2022年

パネリスト: 杉山 哲平（札幌市立北白石中学校）
・札幌市立北白石中学校 教諭 ・ヴォレアス北海道U15チームコーチ ・JSPOバレーボールコーチ４
・日本バレーボール学会理事 ・北海道バレーボール協会指導普及部指導者養成部員

総合司会: 永谷 稔（北翔大学 教授）
・日本バレーボール学会理事 ・日本バレーボール協会アンチドーピング委員会主事
・JSPOバレーボールコーチ4

参加者総数：対面参加者10名、オンライン参加者最大数35名・申込61名

【ミーティングスケジュール】

	午前の部（研修教室）		午後の部（第1体育館）
9：30 ～ 10：00 ～	受付開始 開会 FIVBインストラクターとは －役割と責務－ フィリップ・ブラン氏について －彼の友人として、－同僚・スタッフとしてー 今のFIVBの指導の実際とは －FIVBコーチコースの概要（レベルⅠ、Ⅱ及びⅢ）－ 日本のバレーボール指導への提言 －海外から見える風景：私の客観的感想－ 質疑応答 休憩	12：45 ～ 14：15 ～ 15：45 ～	オンコートレクチャー① FIVB　コーチコースLEVEL１の内容から オンコートレクチャー② FIVB　ｺｰﾁｺｰｽLEVEL２・３の内容から 質疑応答・閉会
11：45 ～			

【講義】

日本の指導者資格のシステムが構築されているが、FIVBコーチシステムは日本ではあまり知られていない。 世界的にはFIVBコーチの方がメジャーであり一般的である。国を挙げてサポートしているところもあるくらいである。以前からFIVB講習会は実施されており、日本でも行われていたが、日本人の参加者は稀であり、ほとんどいなかった。それは、費用は高額であることも要因かもしれないが、知られていないことと必要性が示されていなかったことが挙げられる。

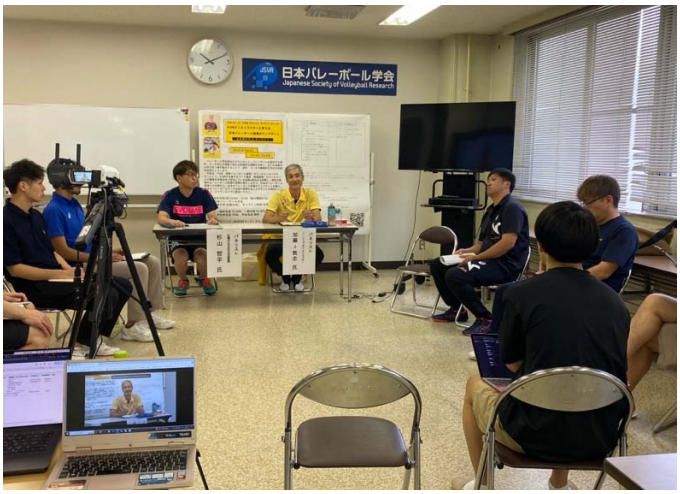
それでは、FIVBコーチを持っているとどうなのか？正直なところ、日本では何も変わらない。JSPO資格はベンチ資格として有効であり、国民スポーツ大会においても準じている。したがって、意味がない資格ではないものの、日本国内では有効性がないと考えられがちではないかと推察する。本来は日本国内でも何らか意味づけがされるべきである。コーチ3（JSPO資格）以上であればFIVBコーチコースの受講者として推薦はされることを考えれば、JSPO講習内容と擦り合わせがなされればベストである。大きな講習内容に違いがあるかと言われれば、そんなにないものの、指導の裏付けや根拠にはなり得、FIVBではいかにバレーボールが持続できるかに重点が置かれている。レベル1ではHow to play、レベル2では How to Teach、レベル3では How to Coachといったカタチである。

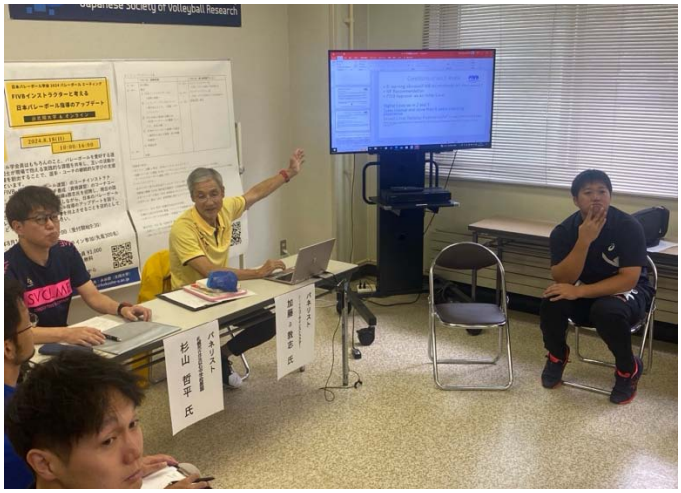
フィリップ・ブラン氏との繋がりについては、彼がFIVBコーチのトップオブザトップとして指導をしている際、2003年フランス代表監督時に加藤氏が通訳として入っていたことである。フランス代表の練習を見ると日本のバレーに合っていると直感したようである。彼は積極的にボール出しをしながら、選手とのコミュニケーションを深めたり、コンディションを確認しているようであった。その後、ポーランドのコーチに就任し、ワールドカップで来日した。日本代表には非常に関心を持っており、日本代表監督を外国人監督にとの流れもあった。その時日本代表監督であった中垣内氏が外国人コーチを希望し、矢島強化委員長に直談判したとのこと。ブラン氏はお金（給料）ではなく、あくまで代表監督というポジションがやりたいと熱望したこともあり、その後、日本代表の監督となったことは非常に自然な流れであった。

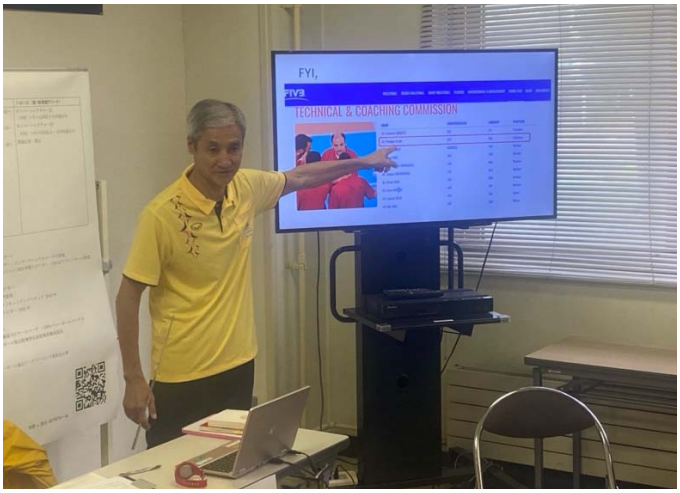
FIVBコーチコースで最も重要視されているポイントは、ピリオダイゼーションとピーキング、チームづくりのコンセプト（8年間に渡る）であった。そこで、4日スパン、2日（1日半）でクリティカルとフィジカル練習を繰り返し、4年後のオリンピックを念頭にしたサイクルを、年間、月間、週間、日間に落とし込んでいった。代表選手だからこそ、能力が高いからこその関わり合い方、それが全てである。決して小中高などのチームにも同様で、皆そうすればいいわけではないことは、承知しておいて頂きたい。国際的な指導スタイルとして強調されている部分としては、「Compensation theory」と言い、落として跳ね上げる、元より上がるといった考え方である。加藤氏からみた、日本のバレーボール指導について、日本は何でも揃っているし、何でもやってくれる。一方、海外や途上国はそんなことはなく、たくましさがある。自分で何とかするしかなく、どうしようか考えなければならない。日本は、アジア諸国だけでなく、欧州各国と比較しても恵まれているにも関わらず、基本的なモラルが低下していると感じる。逆に日本はバレーボールをするハードルが高くなってしまっているのではないか。とのお

話で締めくくられた。

加藤氏のお話では、一ファンや、仮に関係者であって外から見ているだけでは分からなかった部分であり、非常に興味深かった。ブラン氏のどのような点が優れていて結果や改革につながったのかがよく分かり、日本代表のスタイルが大きく変化した理由、要因、原因が垣間見られた。対面参加は少なかった分、座談会形式をとったことで積極的な質問や意見交換がなされた。講義終了後も昼食の時間を惜しんで質問や意見の交換が行われていた。







【オンコート】

午後のオンコートレクチャーでは、前半はFIVBコーチコースLEVEL 1の内容から、後半はLEVEL 2・3の内容を中心に行われ、午前中の講義において、対面参加者からの指導内容のリクエストを受けて、それらに対応しつつ、オンライン参加者からの質問にも都度応じながら進められた。

主なリクエスト

・高校男子：レセプションの構築方法 DEVELOPMENT

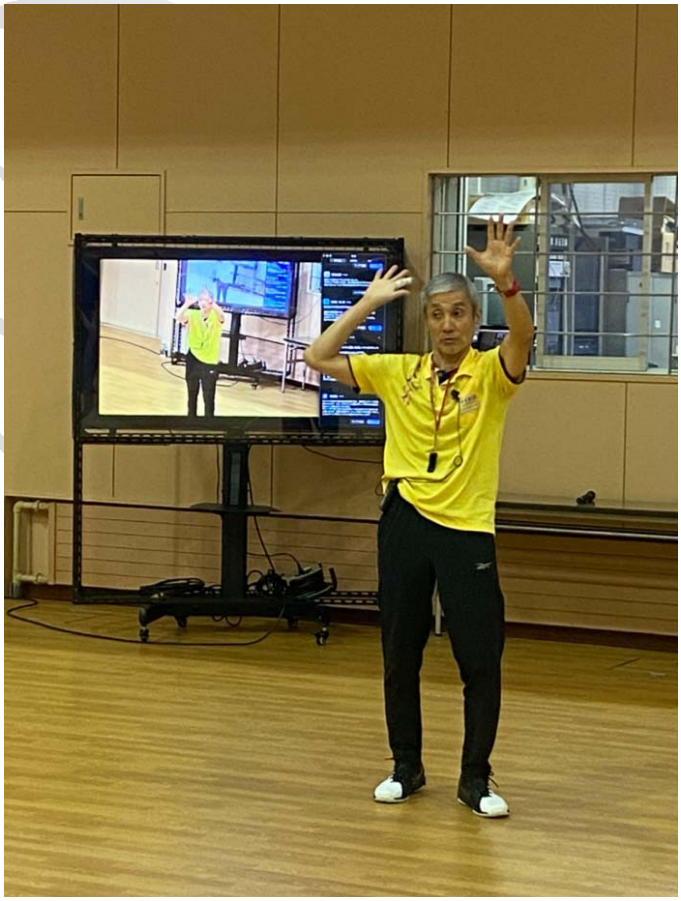
・小学生男女：選手へのフィードバックの方法

・中学生男子（選抜チーム）：ブロック　・シニア（Vリーグ）：ブロックからのCOUNTER ATTACK

・高校生男女：ビギナーのスパイク、特にハイセット、セッターのセットポジション

北白石中学校男子バレーボール部をモデルチームに、北翔大学男女バレーボール部のお手伝いのもと、非常に熱心に且つ丁寧な指導方法の説明や示範が行われた。FIVBコーチコースのすべての内容を伝えることまでは至らなかったが、時間いっぱい十二分の指導が展開され、予定時間を超え、さらには終了後も参加者が納得のいくまで説明やご指導されている姿には、非常に感銘を受けました。

本ミーティングは、学会企画委員会沼田委員長を中心に、開催決定から非常に限られた時間で計画いたしました。学会会員だけでなく、できるだけ多くのバレーボール関係者にとって有益な情報提供、議論の場となればと企画したところです。残念ながら、告知期間が短く、北海道開催ということもあり、対面参加者は限られましたが、道外からの対面参加者もありました。オンラインの配信も軌道に乗っていることから、今後はハイブリッド開催が利便性の面では定着することと思いますが、やはり対面での受講、オンコートレクチャーの醍醐味は代えられないことであります。このあと12月か年明けにはバレーボールセミナーが、年度末には学会大会が慶應義塾大学で、実施・開催予定となっております。企画委員会としても早期の告知、多くの参加を期待するところであります。以上、2024年日本バレーボール学会　バレーボールミーティング報告とさせていただきます。　　文責：学会企画委員（永谷稔）



対面参加者全員での記念ショット

両パネリストと会長、副会長および企画委員のショット

日本バレーボール学会 第30回記念大会のご案内

主　催：日本バレーボール学会

主　管：日本バレーボール学会 第 30 回 記念大会実行委員会

1. 期　日：2025 年 2 月 25 日（火）、26 日（水）
2. 会　場：慶応義塾大学日吉キャンパス

一般研究発表申込：2025 年 1 月 28 日（火）まで

内容等について詳細が決まりましたら、JSVR ホームページ等でお知らせいたします。

日本バレーボール学会 2025年度 研究助成申請要項

1．目的

本事業は、バレーボールに関する研究に対して助成を行い、研究の促進を図ることを目的とするものである。

2．採用件数・助成額

2025 年度の募集件数、助成額は以下の通りである。

採用件数 若干数　助成額 1 件 15 万円（上限）

ただし、研究助成金を所属機関へ支払う間接経費／オーバーヘッドに充当することはできない。

3．研究テーマ・内容

研究のテーマ・内容はバレーボールに関する内容とする。また、あらかじめ研究テーマ・内容を設定して募集する場合もある。ただし、2025 年度については、特に研究テーマ・内容を設定しない。

4．申請資格

日本バレーボール学会会員の個人またはグループとする。

5．申請手続

※申請書については学会 web サイトよりダウンロードしてください

『研究助成申請書』に必要事項を記入し、申請期限までに以下のメールアドレスに、メール添付で送信すること。

(1) 申請期限 2025 年 1 月 7 日（火）（必着）

(2) 申請書の送信先 E-Mail: atsutakano@tohtech.ac.jp

〒 982-8577 宮城県仙台市太白区八木山香澄町 35-1

東北工業大学 総合教育センター

日本バレーボール学会研究推進委員長 髙野淳司 宛

6．申請手続き上の注意

(1) グループで申請する場合、研究代表者が申請者となること。

(2) 研究代表者を含め、共同研究者の全員が、2024 年度までの年会費を納入済みであることを確認して申請すること。未納の会員名が記載されていた場合は、無条件で選考対象から除外する。なお、特別会員（顧問等）については、その限りではない。

7．研究助成の決定

(1) 選考は、選考委員会での結果を受け理事会にて決定する。

(2) 選考に際しては、研究計画・方法の具体性、研究組織の適切性などを考慮するとともに、日本バレーボール学会の知的資産として共有できるものを優先する。

(3) 選考の結果は、総会にて報告され、その後、文書またはメールで通知する。

8．研究成果の報告等

(1) 研究期間は、2025年 4 月 1日～ 2026年 3月末日までとし、研究代表者は、その研究成果を2027年度発刊予定の機関誌『バレーボール研究』に報告書を掲載する義務がある（投稿は2027年2月まで）。なお、投稿に際しては、原則として日本バレーボール学会大会での発表を前提とする。

(2) 研究代表者は、研究助成の決算報告書を、研究期間終了後の翌月末までに、日本バレーボール学会に提出しなければならない。

(3) 研究成果の発表にあたっては、日本バレーボール学会研究助成に基づくものであることを明記すること。

日本バレーボール学会機関誌「バレーボール研究」
第 27 巻への投稿論文を募集します!

本学会では機関誌「バレーボール研究」を毎年 6 月に発刊しています。バレーボールに関する研究業績の発表と、会員相互の情報交換の場として大いに活用していただきたいと思います。

独創的な原著論文はもちろんですが、会員の皆様方が日頃コートの上で指導されている指導法や実践記録、また授業や練習の実践例などの報告も掲載し、あらゆる角度からバレーボールの理論と実践の融合を図りたいと考えています。

なお、投稿に際しては投稿規定（既刊機関誌および JSVR ホームページに掲載）を参照の上、下記編集委員会宛に送付願います。投稿種類としては、1）総説、2）原著論文、3）実践論文、4）研究資料、5）指導実践報告、6）内外の研究動向、7）その他、があります。投稿の際は希望種別を明記するようお願いします。

投稿はオンライン（電子ファイル）で受け付けています。また、投稿は随時受け付けておりますが、当該年度の機関誌に掲載するためには、前年度の 2 月末までの投稿をお願い致します。3 月以降に投稿された論文については、査読・編集の日程の都合上、次年度の掲載予定となります。

会員の皆様から多くの投稿をお待ちしております。

オンライン投稿先
hirobumi@u-gakugei.ac.jp
日本バレーボール学会 編集委員会
委員長：高橋 宏文

事務局便り

2024年4月より学会HPをリニューアル公開し、学会ロゴも作成致しました。これからも多くの皆さまにバレーボールに関わる様々な研究情報を提供していきたく思います。また、機関誌『バレーボール研究』は今年度発行の第26巻より紙媒体での発行を止め、電子版のみの発行（J-STAGEへの掲載）となりました。

学会HP「ライブラリ」のコーナーでは、会員によって出版されたバレーボール関係の書籍やDVDなどを紹介しております。書籍やDVDなどの情報がございましたら、事務局までお届けください。

会員の皆様宛にメールでのご連絡・ご案内をしております。メール未達の方におかれましては、メールアドレスの登録および変更申請をお願い致します。

住所変更･所属変更があった場合は､学会HPの「登録変更フォーム」より送信してください（ページ･トップの「各種手続き」→「登録変更」)。ご本人からの申告がないと住所録が変更できないので、ご協力のほどお願いします。

年会費納入に関しましては、自動引き落としを選択することも出来ます。毎年6月に指定された口座から年会費を引き落とします。次年度以降、振込での納入の必要はありませんので、振込手数料や振込手続きが不要になります。別途お手続きの必要がありますので、ご希望の方には申込書類を送付致します。事務局までご連絡をお願いいたします。

事務局アドレス　jsvr.office@gmail.com

＜年会費振込先＞

郵便口座名称：日本バレーボール学会

郵便口座番号：00240 － 2 － 66791

また、他の金融機関からの振込の場合、以下の通りになります。

銀行名　ゆうちょ銀行

金融機関コード　9900

店番　029

店名　〇二九店（ゼロニキュウ店）

預金種目　当座

口座番号　0066791

カナ氏名　ニホンバレーボールガッカイ

The Japanese Society of Volleyball Research